

先程からお父があまりにも無表情で、彼が感情を失っているのではないかと不安になっていたからかもしれない。

「あッ♡ああ…ッ♡♡あああ……ッ♡♡」

しかしお父の顔に表情らしい表情を見出したことで、この状況が余計、恥ずかしく思われてきた。そして何より——仕置きが怖いせいではあるが、実の父の雄茎を舐め、男に犯されて好<sup>よ</sup>がっているこの姿を見てお父が自分を軽蔑したのではないかと、それが恐ろしくて仕方がない。

「あ…っ♡♡あああ…っ♡ああ…ッ♡」

これ以上あさましい姿を晒してはならない——そう思うのに、そう思えば思うほど、体内に打ち込まれる淫楽が濃く感じられてもくる。

(だめ…っ、だめ……っ、だめえ……っ！♡)

ずちゅッ♡ずちゅッ♡♡ずちゅッ♡♡——

ひと突きごとに臓腑を耐えがたい悦楽に支配され、きゅうっ♡、きゅうっ♡と肉洞が引き絞られる。

もはや命じられた奉仕はまったくできておらず、だらしなく唾液をたらず紅潮した